Museum News
Planning Office

絵：柳田 基

神戸市立小磯記念美術館にて関西学院創立 125 周年記念の特別展

「関西学院の美術家」を開催
～知られざる神戸モダニズム～

公立館で初の関学展

博物館開設準備室では、これまで時計台２階の仮展示室で９回にわたり企画展を開催してきました。しかし、今年度は大学博物館の開館準備として時計台内部を改装するために企画展示ができない状況にあります。

そのような折に、神戸市立小磯記念美術館より関学出身の美術家の展覧会を企画したいという申し入れがあり、関西学院創立 125 周年記念事業として全面協力することになりました。

1992 年に六甲アイランド公園に開館した小磯記念美術館は、神戸出身の洋画家小磯良平の偉業を顕彰するために活動をおこなっていますが、他にも小磯に関係する画家や阪神間の近現代の芸術家なども対象にした幅広い展示活動をおこなってきました。その美術館が関西学院の美術家をテーマとして取り上げることになったのです。公立館で本学出身の美術家だけを対象にした展覧会が企画されるのは初めてのことです。

神戸モダニズムを担う画家たち

本学においては、伝統ある「絵画部弦月会」を中心に創作活動が繰り広げられました。大森啓助（1898-1987）、野口彌太郎（1899-1976）、吉原治良（1905-1972）、川西祐三郎（1923-）、片岡真太郎（1926-）、石阪春生（1929-）などの美術家を輩出しています。版画家の北村今三（1900-46）、春村ただを（1901-77）は 1922 年に神戸で初めての創作版画展の開催に尽力し、近代美術史に重要な足跡を残しました。また、卒業後に母校の美術教師となった神原浩（1882-1970）は、緻密な描写の銅版画を得意とし、神戸港や洋風建築を好んで描き、関西学院のキャンパス風景も多く残しています。

国際色豊かな港町神戸が眼前に広がる原田の森の校地や昭和初期に移転した上ケ原のヴォーリズ設計による学舎、その洋風建築と緑が溢れる美しいキャンパスから多くの美術家が巣立ちました。

神原浩〈上ケ原学院風景〉

今回の特別展「関西学院の美術家 ～知られざる神戸モダニズム～」は、大正から戦前にかけて関西学院で学んだ美術家の代表作を一堂に集め、本学が神戸（阪神間）モダニズムに果たした役割の一端を明らかにしようとする試みです。

関学人の協力を

本学はこの展覧会にさまざまな形で協力をします。本学が所蔵する作品の貸し出しはもちろんのこと、展覧会図録の制作に協力するとともに、グリークラブと OB 合唱団の新月会によるロビーコンサート、本学教員によるワークショップなども企画されています。また、目には見えないのですが、展覧会の前に傷んだ作品を修復するという地道な作業にも協力が欠かせません。

さまざまな関学人のお力添えによって、本展が成功することを願っています。そのためにも、学生・保護者・同窓への宣伝は大切なことです。皆さんもそろって、お出かけくださいますようにお願い申し上げます。

（博物館開設準備室長　河上繁樹）

関連展覧会情報

神戸市立小磯記念美術館
特別展「関西学院の美術家～知られざる神戸モダニズム～」

会期　2013.7.20（土）▶ 10.6（日）
時間　10:00 ▶ 17:00(入場は閉展 30 分前まで。特別展開催中の金曜日は 18:00 閉展)
休館　毎週月曜日（休日の場合はその翌日）
交通　JR 住吉駅・阪神魚崎駅で六甲ライナーに乗り換え、「アイランド北口駅」下車、西へ徒歩すぐ。

〈問い合わせ先〉
神戸市立小磯記念美術館
〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中５丁目７
TEL 078-857-5880

※会期中、関西学院同窓会会員は『母校通信』の提示で１回に限り同伴者１名まで団体料金にて入場可能。

吉原治良〈作品 1961-1962〉

展覧会報告

新劇、輝きの'60年代

大阪労演とその時代Ⅱ

1960-1969

大阪労演資料の第二回展を開催しました。今回は大阪労演の黄金期である '60 年代に焦点をあて、名作舞台の資料を通して動乱の時代をたどりました。また初の試みとして名作舞台の DVD 上映会を行い、多くの方にご来場いただきました。

2012.10.22（月）▶ 12.21（金）
10:00 ～ 16:30（日曜祝日休館）
関西学院大学　西宮上ケ原キャンパス
時計台 2 階展示室

入場者数	1149 人
記念講演会参加者数	29 人
名作舞台上映会参加者総数	197 人

待望の第二回大阪労演展

動乱の時代と劇団、そして労演

昨年度秋学期より「大阪労演とその時代」と題し、演劇鑑賞団体「大阪勤労者演劇協会」（略称「大阪労演」）の展覧会をシリーズで開催しています。第一回展では大阪労演のはじまりと発展の時期である '49 年から '59 年に焦点を当てた展示を行いましたが、今回は大阪労演の全盛期であると同時に斜陽化への転換期でもある '60 年代にスポットを当てました。

'60 年代は高度成長期によって日本社会が大きく変化したまさに動乱の時代でした。そういった時代の波は演劇界にも押し寄せ、戦後世代による新劇批判が展開され、演劇の多様化、劇団の解散や団員の脱退が起こるなど、新劇を取り巻く環境は大きな変化を迎えることとなりました。演劇界の変化は大阪労演の活動にも影響をあたえました。会員数が増加の一途をたどっていた '60 年代前半は大阪労演にとっての全盛期となりました。しかし '65 年 10 月の「ファウスト」（俳優座）上演時の 23650 名を上限に会員数は歯止めの利かない下降をはじめます。

新劇の全盛期であり、また模索の時代でもあった '60 年代の例会（毎月行なわれる上演会）では、「火山灰地」（民芸）や「ハムレット」（俳優座）、「女の一生」（文学座）、などの名作が多く上演されました。一方、当時の社会情勢を反映した「沖縄」（ぶどうの会）や「真田風雲録」（合同公演）、「ベトナム討論」（俳優座）といった新しい作品も頻繁に上演されました。

このような上演の背景に迫るため、展覧会場では例会内容と照会できるように当時の出来事を壁面に掲載しました。この他、新たな試みとして iPad を使用し新聞記事や舞台写真、音源など補助資料の展示を行ないました。操作性の観点からは十分とは言えない展示でしたが、限られた展示スペースを有効に使うことができ、また写真や文字を自由に拡大して見ることが可能となりました。来場者の反応も見やすかったと上々で、今後も有効な展示のアイテムとして活用できるでしょう。

本展覧会が博物館開設準備室としては最後の展示となりました。今まで足をお運び下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。1 年半の準備期間をいただき、2014 年の秋に大学博物館として開館します。どうぞご期待下さい。

関連企画

開催記念講演会・名作舞台上映会

11 月 3 日（土）には、演劇評論家の河内厚郎氏（神戸夙川学院大学教授）にお越しいただき、新劇の成り立ちから '70 年代に至るまでの演劇事情についてお話をうかがいました。

西宮に生まれ青年期を東京で過ごされた河内氏は関西と関東両方の演劇活動に精通されており、今回の講演では劇場を主軸に演劇の変遷についてお話し下さいました。高度経済成長によって社会が豊かになりつつあった '60 年代半ばは、様々な種類の演劇が出そろい、劇場も多く新設され、充実した熱気あふれる時代でした。しかしその後すぐ、テレビの普及やその他様々な要因により新劇の斜陽がはじまりました。日本生命の社員として、日生劇場で行なわれていた劇団四季を中心とした新劇の公演を鑑賞し続けた河内氏は、'70 年代には入場者数の減少に伴い新劇の商業演劇化が始まったと述べられました。

年間多くの講演を行なっておられる河内氏のお話はわかりやすく軽妙で、会場から始終笑い声が上がるなごやかな雰囲気の講演会となりました。

また開期中毎月 1 回づつ名作舞台の DVD 上映会を行ないました。10 月 27 日（土）には俳優座の「ハムレット」（1964 年 6 月於：日生劇場）、11 月 17 日（土）には民芸の「炎の人～ゴッホ小伝」（1977 年 3 月於：都市センターホール）、12 月 8 日（土）には文学座の「女の一生」（1961 年 1 月於：第一生命ホール）を上映し、多数の方がご来場くださいました。4 ～ 50 年前の映像は画質や音質があまり良いとは言えないものでしたが、仲代達矢や滝沢修、杉村春子といった往年の大俳優の名演が再びスクリーン上によみがえり、鑑賞者からは「懐かしい」「やはり心にしみる」などのご感想が聞かれました。

観覧者の声

アンケートより

時代背景も交えて感じることができ、楽しく拝見させていただきました。レイアウトもこっていて見やすかったです。ありがとうございました。

（一般　女性　30 歳代）

労演、労音が盛んだった世代の人間として、懐かしく拝見しました。

（一般　男性　60 歳代）

解説がわかりやすく展示順も明解だった。iPad で見るのもみやすく楽しめた。

（学院関係者　女性　40 代）

タッチパネルの展示物やテレビが設置してあって全体的に華やかでよかったです。

（関学生　女性　20 歳代）

今日は思いがけず学生時代に戻らせてもらいました。作家さん俳優さんに会え 1960 年代の苦しみと希望を思い出し自分の一生の締めくくりを考えました。ありがとうございました。

（男性　70 歳代）

展示内容はとても良かったが、テキストの字がもう少し大きければ読みやすいなと思いました。

（関学生　男性　20 歳未満）

かつて舞台を見たことのある数々を改めて展示という形で再会する機会が得られたいへんうれしく思います。

（一般　70 歳代）

3 回の演劇映像上映はとてもすばらしいことだと思う。ただ、名場面 1 シーンだけでいいので、常設会場で iPad で見れれば、動きとしての演劇がより理解できたと思う。無理なことは無理とわかっている上で、あえて希望をいえば…。

（学院関係者　男性　30 歳代）

なつかしい俳優の顔がみられました。会員の手紙等、舞台と観客席が近かった労演の組織は良かったです。

（一般　女性　50 歳代）

岡田事務局長の手帳、大阪労演の屋台骨を支えた " 大阪のオバハン " を思い出しました。

（一般　男性　70 歳代）

ある意味、なつかしさと自省とを呼びさまされます。みにくる人の年齢予想をしていただけますか（もう少し字を大きくする、（タッチパネルの）操作は簡単に）。

（一般　女性　60 歳代）

名作舞台上映会に参加できなかった。ぜひ又機会を作ってほしい。

（一般　女性　60 歳代）

新劇自体にあまり馴染みがなかったので、導入部でもう少し示されていれば良かったと思います。iPad で多くの写真を見ることができて良かったです。常時、一部だけでも上映されていればおもしろかったと思います。

（関学生　女性　20 歳代）

昨秋からの「労演シリーズ」、これからも楽しみにしています。iPad 利用、わかりやすいです！

（学院関係者　男性　50 歳代）

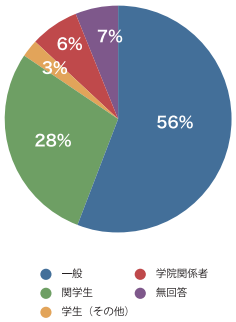
何度か展覧会を拝見させていただきましたが、今回の展示が一番資料も多く、充実していたように思います。iPad も適宜配置され全体的に見やすかったです。2014 年度まで一時お休みということですが、ぜひ又来たいと思いました。ありがとうございました。

（関学生　女性　20 歳代）

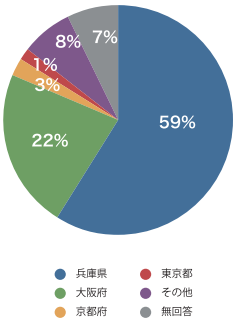
アンケート統計

アンケート回答者数　501 人
アンケート回収率　43.6%

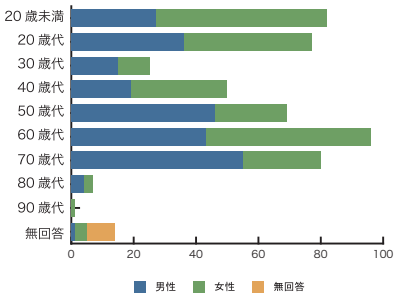
アンケート回答者内訳	
一般	278
関学生	141
学生（その他）	18
学院関係者	34
無回答	30



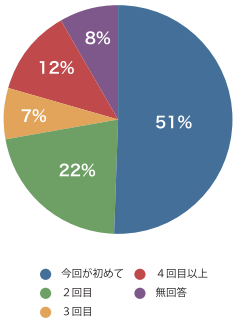
都道府県別観覧者	
兵庫県	296
大阪府	112
京都府	13
東京都	8
その他	36
無回答	36



年齢・男女別観覧者	男性	女性	無回答
20 歳未満	27	55	
20 歳代	36	41	
30 歳代	15	10	
40 歳代	19	31	
50 歳代	46	23	
60 歳代	43	53	
70 歳代	55	25	
80 歳代	4	3	
90 歳代		1	
無回答	1	4	9



展覧会来場回数	
今回が初めて	254
2 回目	108
3 回目	37
4 回目以上	61
無回答	41



公開研究会

–実物とデジタル画像による文化財考察–

本室では学内で開催する展覧会と共に、学外関連諸機関との連携を推進し、その活動の成果を広く社会に公開することを目指しています。その一つとして、高精細デジタル画像を活用した研究会を公開しています。これは京阪神の美術館で行われている展観に合わせ、展示作品の高精細画像やそれに関連する画像をスクリーンに映し出し、それらの作品について話し合う場としています。そしてこの場で出された見解を、「高精細画像による文化財研究」という小冊子にまとめ、研究会の内容を伝えることに努めています。

第６回公開研究会の開催

共催・会場：公益財団法人黒川古文化研究所
題名　　：鐔の面白みを探る
講師　　：黒川古文化研究所研究員　川見典久氏
講師・司会：黒川古文化研究所研究員　杉本欣久氏
開催日時　：2012年11月10日（土）

刀剣に付けられた、長径が10cmにも満たない鐔に込められた思いを、高精細画像を用いて探ることを今回の目標としました。会場では数センチの部分が、大きなスクリーン一杯に映し出され、新たな視点を喚起することができました。また一人の講師、あるいは複数の講師がそれぞれの見解を述べるという形ではなく、二人の講師の掛け合いを中心に会が進行しました。

研究会は、透かし鐔は単なる二次元のシルエットではなく、立体感を意識しているとの指摘から始まりました。そして鐔に施された文様表現の表裏に対する意識、制作技法（鏨・金箔・象嵌・材質・色あげ）、そして魚子打ち等をめぐって、会場からも活発な意見が出されました。最後に展観中の実作品を再度鑑賞し、研究会を終了しました。

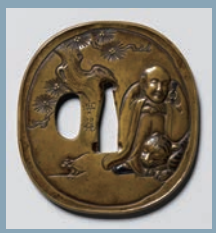
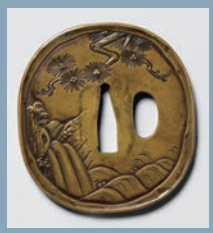
「高精細画像による文化財研究」第２号の発行

題目　：金属工芸の小宇宙
**　　—高精細画像でみる刀装具—**
内容　：第３回公開研究会の記録
講師　：黒川古文化研究所研究員　川見典久氏
開催日：2010年11月13日（土）
場所　：黒川古文化研究所
発行日：2012年12月1日（土）

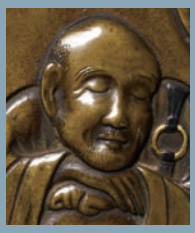
刀剣の柄に施された〈目貫〉、髪を整えるための〈笄（こうがい）〉、そして〈小柄〉といった日本の刀装具は、きわめて精緻に作られています。第３回公開研究会では、展覧会場での肉眼による観察だけでは気付かない、材質、技法、色彩、表現の差異がスクリーン上に提示され、活発な論議を呼び起こしました。その時の内容を、図版を用いて再現しました。

〈内容〉
刀装具の名称と後藤家について／金を用いた作品例／文様の比較による時代の考察（枇杷図三所物・弓に箙図大小目貫・虎獅子図目貫・五疋龍図目貫）／荒木東明の作品について／下地の制作方法について

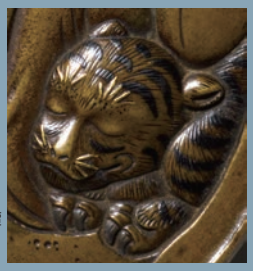
双牛透鐔　表　　裏

豊干禅師図鐔　表　　裏
（土屋安親作）



豊干禅師図鐔
部分



豊干禅師図鐔
部分

豊干禅師図鐔
部分

『金属工芸の小宇宙 –高精細画像で見る刀装具–』より　表紙、4-5ページ、12ページ（部分）

博物館開設準備室通信　第８号
MUSEUM PLANNING OFFICE NEWS No.8
2013.4.1

関西学院大学博物館開設準備室
〒662-8501
西宮市上ケ原一番町 1-155
TEL 0798-54-6054　FAX 0798-54-6066